

妻子の写真）等もはいていたのである。

ソ連機の第二次空襲後小隊員三人ほどが隊列に戻ってこなかった。探す時間も与えられず出発。命令戦争とはこうした無情なものである。第九遊撃連隊千七百人の先頭を真壁少佐部隊長が第一中隊長とともに徒歩で部隊を引率される。普通、連隊長なら馬上豊かに權威こうこうとして全軍をへいげいし進軍されたであろうに、部隊長が徒歩で進軍である。よほど足腰、体力に自信がなければ決心できないことである。

ひとたび山にはいればそこはまさに人跡未踏の山岳である。いかに心急げどジャングルの前進は遅々と行手をはばむ。野に出れば四面敵、結局夜間野道を前進するのが一番効果的なれども、バラバラ前進では兵方角を知り得ず、結局磁石を持つ小隊長の私が誘導せざるを得ず、一夜悪戦苦闘するもわずか三、四里のみの行程に終わることしばしばなり。この四十余日の行軍先頭は毎日が死との対決であり、まさに死の行軍であった。

シベリアでの抑留生活も間接的には死との対決であったが、日ソ開戦当初、終戦を知らされるまでの四十余日

の戦闘行軍はまさに死の行軍であり、小隊員五十余人中、実に四十七人を失ってしまったのである。シベリアでの苛烈な生活は戦友があますところなく記録してくれている。ゆえに私はあえて開戦時の状況を記し、負け戦さの哀れを留めおく。

若き日のつらく、悲しい思い出

和歌山県 崎山 肇

昭和二十年八月九日、早朝より好天で早や秋を思わす羊雲が浮かんでいる。突然東の空よりソ連戦闘機の編隊（ミグ戦闘機）が、上空をかすめ北の空へ消えていった。部隊本部よりソ連軍は東満国境を突破し、交戦状態に入ったとの報があり、宮庭ではにわかにあわたしい。我々八〇三部隊はソ連軍を迎え撃つため、平陽を出発、牡丹江に集結する。

掖河にて陣地構築するも、ソ連軍に包囲されて全滅した。後方部隊に救援依頼に出た我々七人の決死隊もちり

おりになり、単独行動をとり横道河子にて武装解除をさせられた。八月二十日ころ、牡丹江近くの拉古収容所に入れられた。一週間ほどして、有がい貨車に載せられ、綏芬河を経由しシベリヤに入る。貨車には、武装解除された兵士がすし詰めにされており、横になることもできない。扉には鍵がかけられている。敗れたすき間から外の様子を見たり、また用便にも使用する。

列車は時々長時間停車する。ヤポンスキー、ダモイダモイとロシア兵が大声で叫んでいる。我々もウラジオストックから船で日本に帰れるのだろうとうわさが飛んでいたが、列車は急に北へと進路を変え北上する。だれもが帰国できるいちろの望みも断ち切られた。

やがて広々とした原野に停車、全員下車の命令で一夜野宿、枯れ木を集めたき火をする。初秋だというのに夜はかなり冷え込み、零度近い。

朝早くから、ダワイダワイとマンドリンを下げたソ連兵に狩りたてられ、空腹を満たすため生米をかじりながら行軍する。昼前、草原の中ほどに到着した。

ソ連軍のカピタンが日本人通訳に当分の間ここで草刈

り作業をするとの命令で、各班に編成された。まず自分たち各班の住まいをつくれとのこと、一体どうしたことか、まったく検討がつかない。仕方なく手分けして枯れ枝を收拾し、草で編んだ縄で支柱を組み、また草を刈り屋根に載せて草小屋を完成させた。また小屋の近くに大きな穴を掘り枯れ木を渡した便所もできた。何とか雨露をしのげるだろう。

夕日はすでに西に傾き、真っ赤に空を染めている。ひと息つき、ふと故郷の両親兄弟の顔が浮かぶと、とめどもなく涙がこぼれる。

どんな苦労があろうとも生きて帰りたいと心に誓った。

小屋の中は真っ暗で、班の仲間たちとごろ寝であるが、幾分か風もさえぎり何とかしのげた。

朝から草小屋の前に整列し、各班ごとに、大きな草刈り鎌で一列横隊で作業をする。ノルマが課せられており、不なれで思うように作業がはかどらず、次第に日中の暑さと飢えとで激しい疲労の毎日である。何しろ朝晩は米の少ないカーシア（かゆ）が飯ごうに三分の一度度、

昼は黒パンが二百グラムで、班の中でも次々に病人が出る。小生も高熱で倒れたが、草小屋で休むだけで何の治療もない。幸い牡丹江の医薬庫でたくさん薬を用意していたので、二、三日で回復した。死者も数人出た。皆さんで墓場をつくり埋葬した。すすり泣く声が広野の風に乘って聞こえてくる。

屋根の草も数日で乾燥し、天空の月が見える。班員と月を見ながら、故郷話に花を咲かせる。雨が降ると小屋の中はびしょぬれになり、寒さと飢えで苦しい日々である。

約二か月間でこのウスリー地区の草刈り作業も終わり、乾燥小屋を出る。

二十年十一月ウオロシロフ地区第四收容所に移転することになる。十一月ともなるとシベリヤ嵐が吹きつけ一段と寒くなり、あたりはうっすらと雪化粧になり、零下二十度近くに下がる。

約一千人近い大隊で、ヴェンキという山中に穴を掘り一年近く沿海洲の大森林で伐採の作業に従事する。作業は朝早く広場に集合、五列縦隊に並べ点呼を取る。ソ連

兵が員数を数えるのに何度かやりなおしをし、長時間寒い広場に立たされ、手足が凍りそうである。やがて各分隊に分かれ、飯ごうにコウリヤンがゆの昼食を携帯して森林の奥深く入り、ピラノーマ(鋸)、タポール(斧)とで二人一組で、直径一メートル以上もある松の太木を切り倒す作業で、重労働である。糧秣も草刈りのときよりも優遇されるが、昔から「きこり一升飯」ということわざがあり、少々の食糧が増加されても、空腹とノルマが厳しく、その上氷点下三十度の寒さで凍傷にかかる者や、餓死、凍死者が日に日に増している。大地も凍っており埋葬すらできず、山中に捨てて雪をかぶせるだけである。

作業の合い間に小休止があり、ロートル(年寄り)の歩哨がガジエーター(新聞紙)とマホルカ(たばこ)を少しずつ配分してくれ、仲間とたき火で暖をとり語り合う一つ時が楽しい。

夜は穴倉生活であるが、火たき当番をきめて、白樺の皮を燃やし明かりをともし、衣服の修理屋や各人お国自慢や名物、食物など話が尽きない。穴倉は割合と風もは

いらず暖かい、朝になるとだれもの顔が白樺のすすでタヌキの顔のように真っ黒である。

約一か年の月日が流れた。小生も重労働にたえかね、日方が十一貫足らずに落ち込み栄養失調で、ウラジオの病院に入院することになった。病室は大部屋で、四、五十人の患者がベッドに寝ている。中には伐採で両手両足切断された同胞などもおり、見るも痛ましい。五日ほどの入院で体調も幾分かよくなり、体重も増え退院させられる。

二十一年十一月下旬ウラジオ第四収容所に転属した。

収容所の外には鉄条網が四重に張りめぐらされ、要所要所に望楼が立っている。自動小銃を持って立哨している。所内は幕舎が張られ、一班十五人ほど入っている。

真ん中でたき火をし、ここでも白樺の明かりで生活をしている。寒さはますます厳しくなるばかり、一夜に十回ほど小便をたしに屋外へ出る。しばらく暖を取り横になるが、熟睡できない。給食も一向によくならず、黒パンもはかりで分配する。全員の目がはかりに集中する始末で、コウリャンや、米の分量も同じである。従って大便

も一週間に一度しかない。何日も空腹で我慢をしなければならぬ。

作業は道路工事と木造建築で、丸太に墨つけをしタポール（斧）ではずり、角材にする作業で、出来上がった角材を横積みし、ちょうど校倉づくりのような壁をつくり兵舎を建築する。一方では浴場など建設している。真冬ともなると、眉毛も鼻毛も凍り、吐く息も白く、防寒帽子の垂れをおろし作業に従事する。約三か月後、再び栄養失調になり入院することになった。ここでも四、五日の休養で元氣を取り戻した。

二十二年二月ウラジオ第一収容所に転属した。ここでは洋式建築で、れんが運びの作業を二か月余従事。

二十二年四月中ほどナホトカに移動した。一か月余、朝夕広場に集められ、赤旗の歌を歌い民主委員の教育を受ける。やがて米山丸に乗船、昭和二十二年五月十九日舞鶴港に上陸した。

終戦後四十数年満州の広野で散った戦友、またシベリヤ極地で飢えと凍死で亡くなられた同胞に、再び当地訪問する機会があれば、暖かい衣服を持って行ってかぶせ

てあげたいと思いながら心からご冥福をお祈りいたします。

墓穴を掘る

沖繩県 當 真 莊 平

夏は雨にぬれ、冬はスネッグ(雪)にたたかれながら、氷点下三十度の酷寒にさいなまれた肉体は、次第に疲労困ぱいし、デストロフィヤ(栄養失調症)になっていた。その苦悩を具体的に表現できることは、何もしないで寝ることであった。

戦争がもたらしたのろわしい悪夢、シベリア極東地方の伐採作業に激しい怒りも、反撃する気骨もなく朽ちた枯れ葉同然になっていた。

日ごとに病に倒れる戦友がふえてきたので、休養できる別棟の病室を建てた。私(元衛生兵長)たちが寝起きしている(木の葉の堀立小屋)同様な建物で、風雪を防ぐことはできなかった。

寝台は土間から九十センチくらいの高さにして、直径五、六センチの小さい雑木を並べて、デコボコにならぬように配慮したが、曲折しているため多少の高低は避けられなかった。木の葉を置き、さらに黄色の乾燥をぶ厚く敷きつめたが、肩骨、脊椎骨、尾てい骨が痛むらしく、苦痛を訴えていた。

入室後一か月を経過した戦友(とも)は、生きる気力を失ったかのように、一枚の毛布の下から顔面だけ出し、まぶたをあげたり閉じたり、時にはうつろな目を開いたまま一点を凝視し一声も発しなかった。目を閉じるまいと緊張しているようにも見えたが、いつかまぶたの開かなくなった戦友の脈拍をとってみると、トーン、トーンと脈拍は弱くなっていた。どこから飛んできたのか、濃いブルー色の大きなハエが五、六匹彼の唇と鼻にとまった。やがてその数は増して、閉ざされているまぶたにもせわしそうに食いつき始めた。私はびっくりしてすぐ近くの木の枝を折り、戦友の顔面上で左右に振り回しながらハエを追い散らした。ハエはブーンブーンと飛び上がり、また急降下して舞いおりてきた。群がってく